

わがジャレットの記

高際澄雄

ジャレットがわが家に来て今日で一年になる。昨年の二日前までわが家で犬を飼うことになるとは考えてもみなかった。私は犬に興味がなかったし、妻は猫アレルギーがあつて動物はなんでも嫌つていたからである。ところがその妻が十二月十七日の夜、深刻な顔をして、犬が警察官にじゃれつく姿が頭から離れないと言つた。驚いた私が理由を尋ねると、渡良瀬遊水地近くの小さな小学校で校長を務める妻は、こう答えた。

最近、学校近くに野良犬が出るようになり、子どもに危害が及ぶといけないので、警察に捕獲を頼んだ。ふつう、野良犬は警察官から逃げるのに、その犬は警察官を見るとじゃれついて簡単に捕まつてしまった。犬好きの先生たちは、動物愛護センターに送られ、やがて殺処分になるのを知つていて、人なつこい犬を不憫がつたが、引き取ろうという先生はいなかった。妻は、あれほど人なつこいことから、遊水地で飼い主からはぐれたので、動物愛護センターが迷子犬情報を出せば、すぐに引き取られるだろうと、センターのホームページを毎日見ていたが、変化がない。それで、警察官に捕まるときうれしそうにじゃれつく姿が頭から離れなくなつたというのである。それを聞いて私も同じ姿に捕らわれるようになってしまった。そのためとりあえず動物愛護センターに状況を聞いてみようということになった。

翌日センターに電話すると、殺処分の日には教えられないが、明日までに引き取り手がなければ処分の準備に入るといふ。私はあわてて妻に電話して同意を求め、そのままセンターにどうしたら引き取れるか尋ねた。担当者からは、明日までに手続きをすれば引き取れるので、名前を決めた上で、首輪とリードをもって来るようにと告げられた。名前？考えると、警官にじゃれる姿が浮かんできた。じゃれる？わが尊敬する環境科学者ジャレッド・ダイアモンドと重なった。ジャレッド！そうだ！そのままペットショップに急いで、首輪、リード、運搬用クレート、犬小屋、そして餌を店員に教えてもらいながら買い込んで夕方を迎えた。帰宅した妻は、動物嫌いにもかかわらず、犬を引き取ることを喜んでるように見えた。

翌日は、買い込んだクレートと犬小屋を組み立て、指定された午後一時に動物愛護センターを訪れた。担当者にはこやかな人で、犬の飼い方を三十分ほど教えてくれて、書類を記入すると、大切な二点を確認した。飼い主は犬の寿命が尽きるまで飼い続ける義務がある、そして最初の一年が終わる前に飼い主が現れれば返さねばならない、というのである。反対すべくもなく、承諾した。そしていよいよジャレッドを受け取るために玄関に行った。

ほどなく女性の係員を引っ張るように黄色い中型犬がやってきて、玄関のドアに片足を上げておしっこをした。これがジャレッドだった。あれっ、と声を上げると、笑いながら「大丈夫ですよ」と、リードを渡してくれ、手早くティッシュで後始末をした。男の担当者に車まで送ってもらい、クレートを開けるとジャレッドは素直に乗り込んだ。私はおそろおそ

る発車した。

わが家に着くと、ジャレットは私にマウンテイングをしたので、ここで負けてはならないと服従させ、餌を与え散歩に出た。この日、妻は職場の忘年会でなかなか帰ってこなかったが、夜中近く、大好きな先生を連れて帰ってきた。その先生にジャレットがなかなか寝ないと心配を話すと、犬は夜かなり活動をすると教えてくれた。

月曜日になって市役所で登録を済ませ、太平の動物病院で予防注射、去勢手術の予約をして、やっと飼育体制が整ったと思いきや、一週間後の日曜日、ジャレットが妙な咳をしながら苦しそうだった。急いで日曜も開いている動物病院を探すと、栃木駅の近くにあることが分かった。妻と一緒にいくと、かなりの混雑だったが、一時間もしないうちに女医さんに診てもらえた。結果は、肺炎の疑いがあり、フィラリア虫が心臓にいるという。その後の治療は、太平の動物病院に引き継いでもらうことにし、とりあえずの薬をもらった。フィラリア虫は野良犬時代に蚊に刺されて体内で発生したものらしい。咳は翌日には治まった。

ところが暮れも押し迫った三十日朝、ジャレットのリードと首輪が芝生の上であり、ジャレットがいなくなってしまったのである。妻にあわてて知らせ、二人で探しに出かけた。二人でジャレットの名前を叫んでいると、お隣のご夫妻が、さっき町中でゴミをあさっているのを見たと教えてくれた。それで車でその場所に行ったがすでにおらず、付近の人たちに聞いても、知らないという。悪い予感がした。遊水地に戻ったのではないか、途中には交通量

の激しい道路があるので、そこで車に轢かれたのではないか。私たちはその道路に向かった
がない。車で二時間も探し、あきらめて家に帰った。するとまたしてもお隣のご夫婦が、
「ほれ、ジャレッドちゃんが来たよ」という。見ると、ジャレッドが庭に戻ってきた。私た
ちはほっとして、ジャレッドに首輪を付け、リードを木に繋いだ。とにかく生きていてよか
った。そしてわが家を覚えてくれたことに驚いた。十日あまりでわが家を自分の住処と
考え、戻ってきたらしい。妻は賢い犬だと言った。訓練されていたようだとも言った。お手、
お座り、待てができる、これは訓練しないとできない。人なつくく、すぐに人にじゃれるの
も、前の飼い主に大事にされていた証拠だ、と言うのである。

ジャレッドの前歴はどのようだったのか、がこの後私たちをずっと悩まし続けた。犬種は
何か。雑種であることは分かるが、父親、母親はどんな犬なのか。太平の動物病院のお医者
さんは、ボクサーか土佐犬の血が入っている。こんなに頭が大きいのはその証拠だと笑って
いた。年は、半年から一年、若いのだが、確かに近所の犬たちと比べて頭が大きい。あくび
をすると口が異様に大きい。

それに背中に大きな傷跡がある。怪我をしたのか。他の犬を見ると吠えるのは、この傷が
犬同士の争いでついたからなのか。とくに柴犬には敵愾心をもっていて、どんな小さな柴犬
にでも狂ったように吠えて向かっていく。ジャレッドを見ると、いつも「お前の出自はどん
なのか」と問いかけてしまうのだ。

ジャレットを引き取ってから、朝夕一日二回の散歩は欠かしたことがない。しかし、他の犬を見ると吠え、人を見るとじゃれつくので、五十分の散歩でくたくたになる。中型犬でひっぱる力が半端ではないのだ。

それに、野良犬時代からの拾い食いをする癖が直らないので、あちこち首を突っ込んで何かをむしゃむしゃ食べている。おかげで何度も下痢をし、動物病院に連れて行かなければならなかった。

五月、渡良瀬遊水地は目にしみるような新緑に包まれる。ここで散歩できたらどんなにいいかと、ジャレットを連れてかなり奥まで入った。ところが、それまで気がつかなかったのだが、ヨシの間には魚の死骸がかなり落ちていいる。おそらく鷹や鳶の食べ残しであろう。それをジャレットは拾い出し、むしゃむしゃ食べてしまうのだ。数日後それでジャレットはひどい下痢をした。お医者には、もっとひどい細菌性の下痢になると死ぬこともありますよ、と脅された。以来、ジャレットを連れて遊水地を歩くのは止めにした。

今は家から土手までの決まったコースを歩くだけだが、それでもジャレットがいるおかげで、観察力が高まったといえる。犬の嗅覚は驚くほど鋭い。まだ見えない犬を感じ、吠えたり、身構えたりする。相手の犬もジャレットがまだ五十メートルも離れているというのに、吠え出す。また聴覚も鋭く、耳を前方、側方に自在に動かして、音をとらえようとする。だから、ジャレットと一体となって観察して歩くと、数倍の感覚で観察して歩くようになる。

妻は最初ジャレットに触れず、手袋をして撫でていたが、いつしか手で直に触れるようになり、今は手を嘗められるとうれしそうにしている。朝出勤のとき、夜帰宅の時、ジャレットに話しかけ、夜ジャレットが眠り込んでいて起きないと、不満を言う。

ジャレットは餌を食べても満足せず、おやつをおねだりする。そこで、リンゴの皮や、野菜くずを煮たものを用意しておき、縁側に座って食べさせる。食べ終わると、必ず私に背中を向ける。どういう意味か分からないが背中や頭を掻いてやる。すると気持ちよさそうにしている。そこで立とうとすると、足を私の膝に載せて立てないようにする。そこで再び頭や耳を掻いてやると、うっとりした表情になり、ときどき私の顔を嘗め始める。息はいささか生臭いが、舌の感覚からジャレットの愛情が伝わってくる。妻に言わせれば、そのとき私はメロメロになっているのだそうだ。そうかもしれない。とくにジャレットの頭から耳にかけての毛は柔らかく、また揃えた前足の毛並みはよくそろっていて、ジャレットとこうしているのが、至福の時間である。私の心はジャレットが来て以来、八割はジャレットで占められている。

今日、ジャレット引き取って一年を迎え、正式にわが家の一員となって、喜びに堪えない。その記念すべき日を祝福するように、散歩に出ると、雲のない空に満天の星が燦めいていた。犬一匹を飼うことで、人生に対する見方、世界に対する見方がこれほど変わろうとは夢にも思わなかった。猫を見ても、鳥を見ても、子どもを見ても、ジャレットの反映としか思われ

ない。三月に仕事でロンドンに一週間行っていたときなど、公園で犬をみたり、外で食事をしているときに鳩が近づいてきたり、H M Vの、日本ではビクターレコードで使われていた看板を繁華街で見たりすると、ジャレッドを思い出し、すぐにも帰りたくなって、困った。今私は旅行をする気にならない。仕事で家を離れる時さえ、ジャレッドとの別れがつかいのだ。

たくさんの欠点をもち、洗練からおよそほど遠いとしても、その荒々しく真つ正直なジャレッドに惹かれるのである。いつもジャレッドと一緒にいたい、それが私の偽らざる願いである。

(二〇一五年十二月十九—二十日記)

付記

小林守氏とは、国立大学が法人化される時、反対運動で議員会館を訪れ、要請行動をおこない、氏の部屋を訪れた。氏はあいにく留守だったが、秘書の方に丁寧に対応していただき、感銘を受けた。それから十年余りが経ち、集団的自衛権行使容認閣議決定に反対する運動で再びお会いし、私の大学の先輩であることを知って、嬉しい限りである。今回、ご招待いただき、字数オーバーながら、一番心に深く存在している意識を書かせて戴いた。心より感謝申し上げます。

(小林守編『かぬま詩草二〇一六』八三一—八八ページ所載)